

村を守る不思議な神様に魅せられて

小松 和彦 (平成7年卒)

こまつ・かずひこ／1976年、秋田市生まれ。青山学院大学文学部史学科卒。小松クラフトスペース店主。花柳界や民間信仰を中心に秋田県の郷土史を研究している。共著に『秋田県の遊廓跡を歩く』（カストリ出版）、『村を守る不思議な神様・永久保存版』（KADOKAWA）など。秋田魁新報電子版で『新あきたよもやま』連載中。



私が運営する工芸ギャラリー「小松クラフトスペース」（秋田市中通）は、戦後まもなく祖父母が「小松呉服店」として創業したのが始まりである。私はその三代目にあたるが、10代の頃は家業を継ぐ気など全くなく、高校卒業後は考古学者になる夢を抱いて上京した。

転機となったのは、大学4年生の時である。当時、永六輔氏と共にカンボジアのNGO活動に関わっていた父に連れられ、初めて東南アジアを訪れた。そこで目にした人々の素朴な暮らしや、伝統的な手仕事の美しさに私は強く魅了された。いつしか「海外の工芸品を扱う仕事をしたい」という想いが募り、卒業後は実家へと戻る道を選んだのである。

その後、私はアジアやアフリカなどへ毎年足を運び、店で展開する工芸品の収集や商品企画を手掛けるようになった。買い付けの拠点は主に都市部だが、時間を見つけては交通の不便な村々を訪ね、手仕事の現場取材することが私のライフワークとなった。こうして訪れた国々は、30カ国ほどにのぼる。

しかし2010年以降、再び大きな転機が訪れる。世界的なデジタル技術の発達により、各地で急激な物質的変化が起こり始めたのだ。旅の利便性は格段に向上したが、それと引き換えにあらゆる物価が上昇し、伝統的な手仕事は目に見えて減少し始めた。

その頃、私の新たな探求の場となっていたのが、地元・秋田県内でのフィールドワークである。グローバル化の波に乗り激変するアジア諸国に対し、現代の喧

騒から切り離されたかのような秋田の農村地帯では、土着の民俗文化が色濃く息づいていた。

中でも、村境や神社に守護神として祀られる、藁や木で作られた巨大な人形には強い衝撃を受けた。地域によって「シヨウキサマ」や「カシマサマ」などと呼ばれ、大きいものでは高さ4メートルを超す。その御姿は、私が巡ったアジアやアフリカの仮面や木彫といった民族造形にも劣らぬ、ユニークで力強い存在感を放っていた。民俗学者の神野善治氏が「人形道祖神」という名称で分類したこの民間信仰は、東日本各地で見られるが、特に秋田県は突出した分布数を誇っている。私自身も調査を重ねたところ、県内150カ所以上でその存在を確かめることができた。

2018年、私はイラストレーターの宮原葉月氏と共に「秋田人形道祖神プロジェクト」を結成し、調査の成果を書籍『村を守る不思議な神様』にまとめた。宮原氏による印象的なイラストによって、歴史や民俗に留まらず広くアートの関心のある層の間でも話題を呼び、発売直後から大きな反響をいただいで、わずか半年で重版が決定した。翌年に



は続編を刊行し、さらに2021年にはこれら2冊を再編した『村を守る不思議な神様・永久保存版』をKADOKAWAから上梓するに至った。こうした一連の活動を通じて、現在では全国の博物館や大学、ギャラリーなどから講演や展示の依頼をいただくようになっていく。

人形道祖神を祀る集落では、定期的に作り替えを伴う祭りが行われており、私たちはこうした節目にあわせて取材を重ねている。そこで直面するのが、深刻な人口減少である。過疎化の波は行事の継承に暗い影を落としているが、現在、私は秋田公立美術大学の博士課程に在籍しながら、この伝統を次代へ繋いでいくための持続可能なモデルを構築できないか、研究を続けている。

工芸ギャラリーの運営と郷土史研究の活動は「二足のわらじ」のように捉えられるかもしれないが、私にとって「文化を紹介する」という点において通底する仕事である。これまで海外の工芸品を秋田に紹介してきたように、次は秋田の「村を守る不思議な神様」の魅力を、広く世界へ発信していくことが新たな目標だ。